平成22年度

大学入試センター試験 および 国公立大二次・私大

大学入試
分析と対策

英語

学校法人　河合塾
英語科講師 江本 祐一

啓林館

この冊子の内容は次のURLからもアクセスできます
http://www.shinko-keirin.co.jp/koei/index.htm

1．センター試験

（1）筆記試験

出題内容，出題形式ともに09年度と大きな変化はなかった。マーク数は1つ増えて51となったが，増加傾向にあった総語数は4,294語から大幅に減少して3,520語となった。その結果，07年度以降下がり続けていた平均点も115.02点から118.14点へとわずかながら上がった。

第1問

文強勢の問題がなくなり，発音・アクセントの問題だけになった。A の発音問題，B のアクセント問題ともに小問が1問ずつ増えた。発音問題では，母音の問題として，oo と ear が，子音の問題として th と s が問われている。出題されている単語も，発音問題として問われやすいものばかりで，日頃からこのような頻出語を中心に正しい発音を心がけておくことで十分な対策となる。

アクセント問題は音節分けされていない状態で第一アクセントの位置を問う問題。かつてそうであったように，音節分けしてしまうと，その分け方からある程度まで解答が推測できてしまうという問題はあるものの，個人的には，音節分けされていない状態でアクセントの位置を問う問題は解答しづらいのではないかと思う。

第2問

基本的には従来通りの出題。難問ぞろいであった09年度と比べると全体としては解答しやすくなっている。A では expires が正解となる問2がやや難しめだが，他の問題では紛らわしい選択肢も見当たらず正答率は高いと思われる。従来からそうであったが，いわゆる文法の知識そのものを問う問題は今年度も少なく，問5の仮定法過去完了の問題のみである。とは言え，直接的に問われることはないにしても，英文法の知識は英文を読み書きする上で必要不可欠である以上，基本的な問題集を1冊はこなしておきたい。

B では09年度は3問とも定形表現の知識を問う問題が出題されていたが，今年度は従来通り，対話の流れから正解を得る問題が中心。もっとも just between you and me を選ぶ問2は，やや難しかったかもしれない。また，問3はやや異色の出題。「油を水の入ったビーカーに注ぐとどうなるか」という理科の先生の問いかけに対する生徒の答えを選ぶ問題。まさか，水と油が分離することを知らない受験生がいるとは考え難いが，生徒の答えを受けて，理科の先生が They are separate. と言っていることから，正解は確定できる。

C の語句整序問題では，09年度同様の，状況説明つきで選択肢が6つの問題2問に加えて，今年度は選択肢が7つの対話形式の問題が出題されたが，形式面での戸惑いは特になかったと思われる。問1：間接疑問と make OC，問2：目的格の関係代名詞の省略，問3：間接疑問といった出題内容で，09年度の倒置による if の省略の問題ほどではないにせよ，A で文法項目の出題頻度が低いのとは対照的に，C で文法項目が問われている。

第3問

A は語句の意味を類推する問題，B は発言の趣旨を選択する問題，C は文補充問題の出題。A の問1が対話形式である点や，B が議論の形式である点など，細かな部分まで09年度と同じ形式。例年指摘している通り，A については日頃から，予習の段階ですぐに辞書を調べるのではなく，まず文脈から意味を推測してみる習慣をつけさせることが対策となる。B については，教科書の英文の内容をパラグラフ単位で要約する練習や，私立大学で見られるパラグラフ対応の内容一致問題などが，対策として利用できる。

C については，前後の文の内容と矛盾しない選択肢を選ぶことで正解が得られる問題になっている。日頃から，文と文の意味的なつながりを意識した読解を心がけ，さらには，いわゆる discourse markers や代用表現を意識した正確な読解力の養成が対策となる。さらに言えば，10年度の C は，第2パラグラフ「酢の材料」，第3パラグラフ「酢の製法」，第4パラグラフ「酢の使用法」というように，特に設

問個所を含むパラグラフの内容が明確であった。Bの対策として培ったパラグラフ単位で要約や小見出しをつける練習がここでも有効であろう。

第4問

Aはグラフのついた読解問題，Bはフライト・スケジュールの読み取り問題が出題された。おおむね例年通りの出題で，比較的やさしい問題である。Bは09年度に出題された問診票の読み取り問題同様に，いやそれ以上に，実際的な場面での英語の運用力を試す良問だった。

第5問

10年度のセンター試験で最も大きな変化があったのは，この第5問。09年度までの，A：イラストの説明文の選択問題，B：説明に合ったイラストの選択問題，C：4コマ漫画の説明文の選択問題から，同一の状況についての2人の人物の目撃証言とそれに関するイラストを用いた1題の問題に変わった。設問数は3問から5問に増え，配点も18点から30点に増えた。語数は09年度の639語から542語に減少した。また，出題の意図としても，英文で読みとった内容とイラストの一致という視点からのみの出題であった09年度までの問題と比べると，英文とイラストの一致以外に，英文による内容一致問題の要素も加味されたものになっている。

第6問

08，09年度と続いたエッセー調の英文から，論説文の読解問題に変わった。語数は09年度の1,182語から865語へと大きく減少した。また，設問数も1問減って6問になった。設問内容は，09年度以前と同様にパラグラフのグループ分けを含む，パラグラフ単位での内容理解を試す問題が中心である。また，誤答の選択肢は「本文に記述なし」のものがほとんどで，パラグラフ単位に丹念に読み進めることで解答は得られる。ある程度のスピードで，パラグラフを1つの単位として理解しながら読み進めていく力を養ってきた受験生にとっては，比較的落ち着いて取り組める出題であった。

例年，本稿で指摘している通り，読解力の強化には，文法的知識と語彙力を高めるとともに，論説文をはじめ，エッセーや物語文を含めて，様々なタイプの英文を読むことが必要である。その際にはよくわからない部分があっても，少なくとも1つのパラグラフは最後まで読み切り，全体の内容を把握する訓練が効果的であろう。そのためには，比較的やさしめの入試問題で段落ごとに内容一致問題がついたものなどを利用することが考えられる。また，読解系の授業の予習の際は，あらかじめ生徒に制限時間を告げておき，まずは辞書なしで英文を読み，設問に答えさせる練習，つまり「予習は模擬試験だ」というキャッチフレーズでの練習も効果的であろう。私自身の場合，生徒には，「予習段階で辞書を使う際は調べたい単語の半分だけを調べ，調べた単語は絶対にその場で覚えよ，残りは文脈から推測せよ」という指導をしている。外国語である以上，未知の単語があるのは当然のことで，それにいかに対応するかという訓練をさせるという意図であるが，これは第3問Aなどでは，直接役に立つはずである。また，一度読んだ英文を繰り返して読む，という訓練を嫌がる生徒もいるが，既習英文を繰り返して読むことで，読解のスピードが上がるとともに，語彙力の定着にも効果的である。その意味で，授業で扱った英文や自分が問題集等で読んだ英文は繰り返して読むように指導すべきであろう。これらはセンター試験に限らず，国公立大の二次試験や私立大の問題にも有益なはずであるし，たとえ入試で英語が必要なのはセンター試験だけ，というような生徒にも総合的な力を高めさせる指導が必要であろう。

(2) リスニング試験

06年度の導入以来，平均点が36.25点→32.47点→29.45点→24.03点と下がり続けたリスニング試験であったが，10年度は初めて29.39点に上がった。読み上げられる総語数は09年度の1,111語に対して1,088語でほとんど変化はないものの，全体の読み上げスピードが最後までほぼ一定で聞き取りやすくなったことや，やや複雑な計算を必要とする問題がなくなった（計算が必要な問題は1問出

題されている）こと，複数の情報を整理した上で解答を導き出さなければならないような問題がなくなったこと，解答の選択肢の英文がすべて1行に収まっており（ただし，これは09年度も同じ），目を通しやすかったことなどが，わずかながら平均点の上昇につながったと考えられる。とは言え，読み上げられた英語の中に正解の選択肢の単語が出てこない問題や，読み上げられた英語と正解の選択肢の間で巧妙な言い換えがなされている問題，いくつも数字を聞きとって処理しなければならない問題も出題されており，難易度自体にはそれほど大きな変化はなかった，と言うべきであろう。まずは，問3を取り上げる。

問3　What will the man do next?
① Accept cash.
② Get money.
③ Pay by credit card.
④ Use the pay phone.
［読み上げられた英文］
M : Can I use my credit card?
W : I'm sorry but we only accept cash.
M : OK, I'll go to an ATM. Is there one nearby?
W : Yes, you can find one next to the pay phones outside.

正解は②だが，この選択肢に含まれる money という語は対話の中には出てこない。クレジットカードが使えないこと，そしてクレジットカードが使えないことに対してOKと答えた上で，ATMの場所を尋ねていることから，男性は「現金をおろそうとしている」と考えて正解を導く問題である。自分が聞きとれた単語を手がかりに解答を選ぼうとする受験生には正解が難しい問題であろう。もっとも，クレジットカードも ATM も使ったことのなかった高校生の頃の私が，これらの情報から正解にたどり着けるかどうかは疑問である。日常生活に密着した状況での英語の聞き取りという点では評価できるが，高校生をはじめとする大学受験生の日常生活からは少し距離感がある問題ではないかと思う。本問のように正解の選択肢に含まれる単語が英語の中に出てこない問題は問1もそうであるが，これは無理のない出題であった。続いて問20を挙げる。

問20　Which pair can travel by themselves?
① A 2-year-old and a 15-year-old.
② A 3-year-old and a 16-year-old.
③ A 4-year-old and a 12-year-old.
④ A 5-year-old and a 14-year-old.
［読み上げられた英文］
Our airline welcomes children. More than 45,000 unaccompanied children fly with us each year. Whether it's a short flight or a long journey, your child will enjoy a safe and comfortable trip. Here's some important information. Children aged 5 and above may travel alone on flights. Children under 5 must be accompanied by someone aged 17 or older. When your child is traveling alone, please call our reservations desk. We will give you more details about services for young passengers.

いくつも数字が出てくるが，解答の決め手は「5歳以上の子どもは付添いなしで飛行機に乗れること（A）」「5歳未満の子どもには17歳以上の付添いが必要なこと（B）」である。（B）の情報が選択肢の中に入っていないので戸惑った受験生もいたと思われるが，2歳，3歳，4歳の子どもには17歳以上の付添いが必要なので，①～③は誤りで，（A）の情報のみを用いて④が正解となる。

問22　According to the photographer, which of the following is true?
① Doing background research about the area is essential.
② Freezing conditions should be avoided.
③ It is best to leave it to chance when taking pictures.

④ It is important to stay on the main path.

[読み上げられた英文]

... In winter, for example, when the days are short, you need to know where you're going and what you want to photograph. You can get familiar with the area you're planning to visit by reading guidebooks and studying maps. Then, you'll know beforehand where the most attractive locations are, rather than leaving it to chance. ...

紙面の都合で英文は一部分のみの掲載だが，正解の①は読み上げ文の点線部分を要約したもの。他の選択肢に含まれる表現はどれも英文に出てくるため，これも聞き取れた単語を手がかりに解答を導こうとする受験生には難しい問題。10年度はこのようなタイプの出題が従来以上に増えていたが，本当の意味での聞き取りとはこういうものであるべきで，好ましい傾向である。

このようなタイプの設問に対応するには，例年本稿で指摘している通り，落ち着いて最後まで聞き取る姿勢が必要で，平常心で試験に臨めるレベルにまで聞き取りの力を高めておかなければならない。対策としては，①文字を見ないで繰り返し聞き，かなりの部分が聞き取れるようになるまで文字を見ない。②問題に答える。③文字を見て，聞き取った内容を確かめる。④書き取る，という一連の練習を積むのが望ましい。特に④の書き取りまではセンター試験では必要ないという意見もあるだろうが，書き取ることによって，聞き取りに対する自信が深まること，語彙力や文法力の向上（聞き取れなかった部分を文法の知識で修復する）や，正しい綴りの定着につながるなど，その効果は大きいはずだ。

選択肢の英文をあらかじめ読んでおくことなど，リスニング問題には読解力が影響を及ぼす要素も大きい。そもそも読み上げられた速度で英語を理解できなければ，それが言い換えられた選択肢が正解となる問題には対応できない。正しく速く読むということは，リスニング問題で高得点を取るためにも必要である。そのためには，筆記試験のところで述べた既習英文の反復読みが効果的である。

2．国公立大二次試験

（1）読解問題

国公立大学の二次試験では，記述問題が中心となるが，二次試験で出題される英文のレベルそのものはセンター試験のレベルと大きく変わらないことが多い。そのような中で，東京大学の4（B）と京都大学の Ⅰ をここでは取り上げる。

東京大学は，その圧倒的な問題量が特徴で，例年1（A）の要約問題と，3のリスニング問題の出来不出来が合否を分けることが多かった。今年度もこれらの問題が合否に与えた影響は大きいと思われるが，試験直後の受験生の再現答案とその後の合否の報告から考えると，4（B）の下線部和訳問題が合否に与えた影響も大きかった。

（B） 次の英文の下線部（1），（2），（3）を和訳せよ。（2）については，They が何を指すか明らかになるように訳すこと。

Stars are made for profit. In terms of the market, stars are part of the way films are sold. (1)The star's presence in a film is a promise of what you will see if you go to see the film. In the same way, stars sell newspapers and magazines, and are used to sell food, fashions, cars and almost anything else.

This market function of stars is only one aspect of their economic importance. (2)They are also property on the strength of whose name money can be raised to make a film; they are an asset to the stars themselves, to the studios and agents who control them; they are a major part of the cost of a film. Above all, they are part of the labour that produces films as commercial products that can be sold for profit on the market.

（以下省略）

ここで特に扱うのは下線部（2）である。They が指すのが stars であることは明らかであるが，on the strength 以下の構文把握，特に whose の先行詞の確定は難しい。これは，Look at the house the roof of which you can see over there. と類似の構造を持つ英文。この文では which の先行詞を the roof と考えて，of which 以下を the roof にかけて訳そうとする受験生が多いが，これが誤りなのは，関係詞を先行詞と考えられる先行詞 the roof で置き換えて，後半を独立させてみると，you can see over there of the roof. という非文法的な文しか作れないこと，また，前半部分も Look at the house the roof. という非文法的な文しか出てこないことから明らかである。当然，which の先行詞は the house で，前半は Look at the house，後半は you can see the roof of the house over there. が元になっている文である。This is the house which he bought. のような関係代名詞から関係詞節が始まる文や，This is the house in which he was born. のような「前置詞 ＋ 関係代名詞」から始まる文に慣れてしまっている受験生は，“～ ＋ 関係詞 …” や “～ ＋ 前置詞 ＋ 関係詞 …” というパターンは認識できても，“～ ＋ 名詞 ＋ 前置詞 ＋ 関係詞 …” というパターンには苦戦する傾向がある。この東京大学の問題も，on the strength of whose name から関係代名詞が始まっているということが認識できるかどうかが分かれ目であった。なお，この問題文の場合は，whose = of which という意識が受験生の中にあるために，of whose name という形は，より一層不可解に映ったようである。

次に京都大学の問題を取り上げる。年々和訳部分の総語数が増加傾向にあった08年度には450語に達した京都大学の下線部和訳問題であるが，09年度には235語に激減した後，10年度は276語へと微増した。10年度は Ⅰ が非常に重厚な構造を持つ英文の和訳，Ⅱ は構文的にはそれほど難しい点はないものの，いざ和訳しようとすると適切な訳語選択に苦労する英文の和訳が出題され，いかにも京都大学，という出題内容であった。ここでは，「意思決定のもつ曖昧さ」を扱った Ⅰ の下線部（2）（3）を，拙訳と合わせて，次に挙げる。

下線部（2）

For all the intimate familiarity we feel we have with decision-making, it is very difficult to know about it from the ‘inside’: one of the great barriers for scientific research is the nature of subjectivity.

意思決定については熟知している，と私たちが感じているにもかかわらず，「内面」から意思決定について知ることはきわめて難しい。科学の研究にとっての最大の障壁の1つは，主観というものの性質なのである。

書き出しの部分は，いわゆる連鎖関係代名詞節の we feel we have with decision-making が the intimate familiarity を修飾している。先ほどの東京大学の場合と同様に，関係代名詞を先行詞で置き換えて文を独立させると，we feel (that) we have intimate familiarity with decision-making となる。この部分の難しさは，このように元の構造を確かめた上で，have familiarity with A が be familiar with A を名詞化した表現であることを意識し，for all A「A にもかかわらず」にうまくつなげるように日本文を組み立てることにある。

下線部（3）

As anyone who has ever been in a verbal disagreement can confirm, people tend to give elaborate justifications for their decisions, which we have every reason to believe are nothing more than rationalizations after the event. To prove such people wrong, though, is an entirely different matter: who are you to say what my reasons are?

言葉の食い違いを経験したことがある人であれば誰でも裏付けられることだが，人には自らの下した決定を入念に正当化する傾向があるが，このような正当化は事後の合理化に過ぎないということを信じ

るのに十分な根拠がある。しかし，そのような人が間違っていると証明することはまったくの別問題なのだ。私の判断の理由は何々だなどと言う君は何様だ，と言われることになってしまうだろう。

まずは書き出しの関係代名詞の as の処理だが，これは京都大学の受験生のレベルでは難なくクリアすべきもの。主節部分の give elaborate justifications for their decisions は，構造的には give O_1 O_2の平易な構造だが，文意が分かっていなければ自然な日本語に持ち込むのは困難。これに続く非制限用法の関係代名詞節の構造把握がこの下線部でも最大のポイントであるが，やはり，関係代名詞の部分に先行詞を戻すという方法で考えていくべきであろう。実際には受験生のレベルでは先行詞が justifications（for their decisions）である，ということを把握するのはなかなか困難である。そこで，ひとまず□で表して，we have every reason to believe（that）□ are nothing more than rationalizations after the event と組み立てた上で，この構造を把握し，意味を理解して，□ = justifications（for their decisions）ともっていけるかどうかが分かれ目である。ちなみにこの関係代名詞節も連鎖関係代名詞節である。

ここで取り上げた，東京大学の問題も京都大学の問題も，たまたま関係詞節の把握がポイントとなる問題であったが，これらの問題を通して，やはり正確な構文把握力の養成こそが，これらの難関大学に合格するためには不可欠であることが痛感される。すべての受験生にこのレベルの英文を読みこなす力が必要であるわけではないが，速読ということに目を奪われて基本部分をおろそかにしないように心がけるべきであろう。

（2）表現力

例年指摘している通り，表現力を問う問題には，東京大学に代表される自由英作文の流れと，京都大学に代表される従来の和文英訳の流れがあり，自由英作文の方が主流になりつつある。自由英作文では，あるテーマについて自由に自分の意見を述べるものから，英文や日本文を読み，その内容について意見や感想を述べるもの，図表から読み取った内容を述べるもの，あらかじめ伝えるべき内容が設定された上で，手紙や e-mail の形で表現するものなど，多岐に渡る。少数ではあるが，大阪大学（外国語学部以外）のように，和文英訳2題に加えて自由英作文を出題する大学もある。

従来の本稿では東京大学の自由英作文と京都大学の和文英訳を特に取り上げることが多かったが，今年度は，和文英訳の問題としては，筑波大学の問題を見ておきたい。紙面の都合上，下線部のみ掲載する。

（1）人々が十分な水を得られるかどうかは人々がどこに住んでいるかに依存する
（2）なぜならそれらの地域における需要は高く，供給は少ないからだ
（3）アメリカ合衆国ではひどい日照りで多くの都市が水を求めて競い合っている

いずれの下線部も，基本事項の積み重ねで，ある意味で文法問題と言えなくもないが，このような簡単な日本語の概念を英語に置き換えることが，表現問題の基本である。難しいとされる京都大学や大阪大学の和文英訳の問題も，解答だけ見れば基本的な表現の積み上げとなっている。まずは，基本的な問題を数多くこなして，徐々に日本文の見た目を複雑にしていくことで，和文英訳の力は向上するはずである。

自由英作文に関しては，インターネットや携帯電話の功罪，将来の夢，ことわざの説明，日本独自の文物の説明など，頻出のテーマに関する練習から入るのが効果的であろう。特に初めのうちは，具体的に書くべき内容を教師の側である程度まで挙げてやることで，何を書いていいのか分からない，という自由英作文以前の問題も回避できるのではないかと思う。

そして，例年指摘している通り，自由英作文であれ，和文英訳であれ，生徒の書いた答案を添削するだけではなく，もう一度書き直させることが絶対に

必要であるが，その際には，教師が添削する前に，自分が書いた答案を自分で添削する，という作業，あるいは生徒同士で添削させるのも有効であろう。自分の書いたものであっても，改めて客観的に見直せば，内容的な矛盾点や，三単現のｓの漏れなど基本的なミスにも気づくものである。もちろん，その後で，教師が目を通す必要があることは言うまでもない。また，生徒は自分の書いた英語の正しさを気にするが，教師レベルで辞書を引かなければ正しいかどうかの判断がつきにくい表現を無理に使うよりも，正しい表現，その文脈でふさわしい表現は正確に覚えさせ，的確な表現を増やすよう指導する必要がある。

3．私立大試験

私立大学では10年度も圧倒的に客観式の問題が中心であった。空所補充，下線部の言い換え，内容一致などが中心的な出題の形式である。空所補充や言い換え問題では，単語や熟語等の語彙的知識をそのまま問う場合と，文意を把握した上で，未知の（あるいは難解な）語句の意味を推測する必要がある場合があるので，基本的な語彙力の強化と，英文内容の理解力を高めておく必要があるという点で国公立大の場合と違いはない。選択中心の私立大の問題は，分量が多いのも特徴であり，限られた時間内で設問に答えるトレーニングが絶対に不可欠である。大学によって独特な選択肢を作る大学があるので，受験大学の過去問演習は不可欠であるのは，言うまでもない。

■江本祐一（えもと・ゆういち）

京大，医進の授業を主に担当。長文読解，京大英文解釈，京大英作文，医進英語などのテキスト，京大即応オープンの作成メンバー。出版物は「英語暗唱文ターゲット450」（旺文社），「入試英単語の王道」（河合出版・共著），「センターはこれだけ」（文英堂・共著）など。

啓林館のリスニング問題集

▲B5判／本体1色刷・解答2色刷

10分と30分でできるセンター試験リスニング対策!

新刊 リスニングボックス
センター対策 リスニング

問題別 10分 ×22回 ＋ 本番形式 30分 ×2回（ディクテーション ×24回）

- センターリスニング試験対策問題集。
- 問題別10分（22回分）＋本番形式30分（２回分）の構成。

1レッスン2ページ(10分間)で リスニングテスト対策ができる

改訂 プレ リスニングボックス 改訂版
改訂 リスニングボックス 1 三訂版
改訂 リスニングボックス 2 三訂版
改訂 リスニングボックス 3 三訂版

- 「リスニングのツボ」で聞き取りのコツをつかむ。
- 切り離しができる解答欄。

各 B5判／2色刷▶

啓林館 望み 啓く 次代へ 啓く
●http://www.shinko-keirin.co.jp/

〒543-0052	大阪市天王寺区大道4-3-25	TEL.06-6779-1531	FAX.06-6779-5011
〒113-0023	東京都文京区向丘2-3-10	TEL.03-3814-2151	FAX.03-3814-2159
〒003-0005	札幌市白石区東札幌5条2-6-1	TEL.011-842-8595	FAX.011-842-8594
〒461-0004	名古屋市東区葵1-4-34 双栄ビル2F	TEL.052-935-2585	FAX.052-936-4541
〒732-0052	広島市東区光町1-7-11 広島CDビル5F	TEL.082-261-7246	FAX.082-261-5400
〒810-0022	福岡市中央区薬院1-5-6 ハイヒルズビル5F	TEL.092-725-6677	FAX.092-725-6680